



32年の3月に植えつけたみかんの苗木は、雪にも負けず伸びていた。

# 全国ではじめての 共同みかん園誕生記

☆☆☆☆

全国で唯一つという「共同みかん園」  
が天草にある。  
これは、ズブの素人ばかりでつくりあげたその記録である。

☆☆☆☆

## 吹雪の日

前夜から降り出した雪はやむことなく、天草の山々の頂きを真白く塗りつぶし、低い家並みに、船だまりに、ひよろうくと吹きつけていた。

ここは天草郡松島町の蔵江部落。雪が小やみになった頃、松下さんを先頭に、宮本さん、役場の嶽本経済課長、中元普及員の四人は、お宮の裏に続くぬかるみの道を、黙々とのぼって行った。  
この雪でみかんの幼木が痛んではいはいか心配でならないのである。

周囲は雑木ばかりの低い丘のつらなり。その中に一方所だけがハゲた様に褐色の肌を寒々とさらしている。段々畑に整地されたその丘には、点々とみかんの幼木が雪まじりの風に吹きさらされ、それらを覆ったソダには、雪が真白く積つて、一面のまだら模様をつくっていた。

四人は幼木を一本一本、いたわる様に見て廻った。吹雪にもめげず、どの木もどの木もすくすくと伸びていた。

「あッ、芽が出とりますばい！」松下さんの声に三人が駈け寄つてみると、幼木の周囲の土の中から一種位の芽が、双葉をつけて元気に伸びていた。みかん園の肥料にするために播いたヤハズ草の芽であった。

雪にも負けず、風にも負けず、小さな芽は冬の空に向つて双手をあげているようであった。

## 盃貯金

昭和五・六年と云えば今から二十六・七年前。天草の農家は極めて貧しかった。狭い水田と段々畑。山の上まで拓いてはカライモを植え、或は石切りの人夫に出しては僅かな収入を得ていた。

その頃この蔵江部落の人々は盃貯金というものを始めた。「盃」と云つても酒をのむ為の貯金ではない。毎朝一人につき盃一杯の米をへずつてこれを貯えていた。現金収入の少ない農家では、こうでもしなければ、貯金はできなかった。これが支那事変がはつ発した頃には、金額にして相当の額になっていた。

丁度その頃、お宮の裏山を七反歩ほど売る人があつた。だが個人ではとても手が出ない。では共同で買つて共有地しようではないかと、八人の同志が集つて盃貯金でこの山を買つた。  
この山は雑木を伐り払つてしまつと、

あとほきれいな段々畑になった。昔誰かが畑にしているものらしかった。土質がよく、耕土が深い。「こらあ畑にすつとよか畑のでくるばい。」八人の同志たちは喜んで耕した。更に終戦直後、その山続きの八段歩の雑木山を買い込んだ。之に隣り合わせた山の持主も加わつて、実測約五町歩、同志十一人の共有地ができつつあつた。

## 失敗した共同畑

一同は協和会をつくつて、農作業の共同化をはかり、経営改善の研究も始めた。だが、畑として利用したのは、今みかんを植えている約一町歩の段々畑だけだつた。そして、決して成功とは云えない利用状況だつた。

誰かみかんを植えようとい出したので約七〇本植えてみたが、管理不十分で、見事失敗した。その後は各自の持分をきめて、夫々カライモや麦、タバコ、西瓜などを僅かにつくつていたが、一町歩の畑のうち半分は荒地と化してしまひ、共有地の前途に暗い影を投げかけていた。

その間、天草郡の果樹園芸振興が叫ばれ始めるにつれ、いつそのこと、いまい一度果樹園として出発しようという話も再三でたが、「みかん作りもよか、実のなるまで四・五年は一銭も金が入つてこんどばい。」

## 「計画建設」の刺戟

この様な状態が昭和三〇年まで続いた。然し乍ら、県の「計画建設」の出發とともに、天草地域における果樹園芸の振興が強く叫ばれ始め、三一年の一月には県から町の産業実態調査にやつてきた。役場では四月に新農村振興計画を樹立し、耕地の高度利用、特に畑の生産力を水田並みに引揚げようといふ方針をたてた。

なかでも、柑橘栽培は立地条件に応じたものとして特に重視され始めた。然し、零細農家にとつて、みかん園を拓くといふことは大問題である。だが、共同でやれば十分可能だ。共同果樹園こそ、零細農家にとつては最適の方法ではないか。八人の同志たちの頭の中には漸く、黄色のみかんにおくわれた丘の夢が描き出され、皆はじつとしていらなくなつた。

昭和三十一年八月のむし暑いある夜、宮本さんの家集つた一同は、共有地の利用について真剣に話し合つた。

もうこれで三度目の会合である。「県や役場では柑橘園はすゝめよ。ひとつみかん作りを乗り出そう。」

「素人にできるだらうか？」  
皆の目には枯死したみかんの木と、たわ、に稔つたみかんの丘が交互に浮びあがつては消えた。

「金はどうするか？」  
「役場に頼もうぢやないか。新農山漁村建設の助成金でちゆうこつばい。」  
「そんなら普及員の中元さんに来てもらおう。」

使ひの若い者が夜道を走つた。時間はすでに十二時を過ぎていた。  
寝ていた中元さんは「オッ、みかん園ばつくる気になつたか！」と喜んで飛んできた。

すねにくいつく蚊をビシヤリ／＼やりながら、皆は中元普及員を囲んで熱心に討議した。いよ／＼みかんつくりの村長の指導と援助を頼もうと、全員が決定したのは明け方近かつた。

## みかん園誕生

翌九月には、松島町は「新農山漁村建設総合対策」の指定を受け、果樹園のモデル施設が計画されるのを機会に、いよ／＼みかんを植えることになつた。

何しろ八人もズブの素人である。経済課長や中元普及員、或はこの地区担当の県の普及員らと共に研究を重ねた。先進地の視察、果樹栽培講座には交替で必ず出かけた。参考書も貸りてきては、夜おそくまで勉強した。

「四年も五年も現金収入はなか」など誰も考えなくなつた。  
組合長はじめ、会計、記録、施設、技術、防除係などの役割をきめた。

三十一年の末から翌年一月にかけては吹きさらしの中で植穴位置の測量や、有機物刈取、園道作りと頑張つた。三十二年の三月に入り防風林として檜苗を植えた。みかんの苗は天草果樹指導所から頒けて貰つた。普通温州三〇本、早生温州三〇本。苗代二六、〇〇〇円のうち町役場からは一万円の補助が出た。

待望の定植は三月一〇日から四日間かつつてやつた。  
苗木の列は早春の陽光の下で、美しいカーブを描いて斜面をくぎつていた。これまで反収一万円そこそこの収入しか挙げなかつた共有地が、いま反収十万円を約束して一同の前に拡がっている。皆は久しぶりに心豊かな思いだつた。

